〈江戸川乱歩〉像の形成

Formation of the author`s character “Edogawa Rampo”

鈴木 伶奈
Rena Suzuki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 日本文学専攻日本文学専修 修士課程

キーワード：江戸川乱歩，作家像，メディア
Key words：Edogawa Rampo, author`s character, Media culture

１．研究目的

江戸川乱歩は，没後五十年を過ぎた現在でも乱歩作品を網羅した『江戸川乱歩語辞典』や『江戸川乱歩大事典』が刊行され，根強い人気を持つ作家である．研究の場においては，長い間乱歩の作品は海外の探偵小説との比較や多くの物語の舞台となった江戸・東京の文化との関わり等，文学研究者だけでなく他分野の研究者の調査対象となっている．しかし，乱歩の収集家としての性格のおかげで作家本人にかかわる資料が多く残されているにもかかわらず，本人についての研究は作品研究に比べると非常に未開拓な分野なのである．

本研究では、探偵小説界を盛り上げた評論家としての姿や創作以外の分野でも活躍しているが創作活動をする作家としてのイメージに限定して調査を行なった．そのような〈江戸川乱歩〉という作家が時代の中でどのような作家として受容されていたのか，文壇のなかでどのような位置におかれていたのか，当時の読者，同時代評なども丁寧に追いながら変遷を追い，それに対する乱歩自身の反応やその作り上げられた作家像の利用についても明らかにすることが目的である．

２．研究実施内容

〈江戸川乱歩〉という作家は様々な言葉を用いて表象されており，それは乱歩の作品研究においても同様である．本論文ではその中の 2 つの作家像に注目し，その作家としてのイメージの違いや変遷を明らかにし，そのうえでそのイメージを乱歩自身はどう受け止めどのように利用したのかということを明らかにした．第 1 章では「新青年」で「二銭銅貨」を発表し，初めての刊行物『心理試験』を出版した 1923 年ごろの作品にみられるトリックや謎を解く面白さに重点を置いたものを描く探偵小説作家としてのイメージ，第 2 章では「陰獣」などに代表される事件の中で「エロ」「グロ」「ナンセンス」な世界を描く作家としてのイメージである．もちろんこの他にも，「少年探偵団」シリーズなど子供向けの作品を描く作家としてのイメージや，戦後のミステリー再興期に『宝石』の編集を手掛け，新人作家の発掘や紹介をする裏方的な姿などもあるが，本論文では創作活動をする作家として，デビュー当時から受け止められ方が変化したころを中心に調査を行った．

調査は『貼雑年譜』（江戸川乱歩推理文庫特別補巻，1989）を中心に行なった．この資料は乱歩自身による記事等の収集，コメントの記入をしたもので，他の作家にはない貴重な一次資料である．この『貼雑年譜』の有用性は，自身で収集しスクラップしたものであるため当たり前なのだが、掲載されている資料を本人が目にしている，というところにある．〈江戸川乱歩〉という作家像の形成を考えるうえで，作家自身の意図のほかに，外からの影響というものも無視することはできない．他には『二銭銅貨』や『陰獣』を掲載した探偵小説専門の雑誌である「新青年」や，当時の新聞、雑誌等に掲載された広告や書評などから，〈江戸川乱歩〉がどのような作家として受容されていた，またその作り上げられた作家像について乱歩はどのように感じていたのかを自伝的文章である『探偵小説四十年』やそのほか乱歩の評から調査を行った．

３．まとめと今後の課題

本研究では，〈江戸川乱歩〉という作家について，年代によって異なるイメージ形成の過程を初期

（1923 年ごろ）と 1 回目の休筆後の「陰獣」を中心に調査を行なった．結果は乱歩が〈江戸川乱歩〉という虚像を生み出し，初期ではその像と本人の目指していた作家像の乖離はなかったものの昭和 4（1929）年ごろから娯楽性の強い作品を発表しはじめ，広く一般大衆に受ける作家として自他ともに認める探偵小説作家となった．そしてその大衆の読者には，自身が探偵小説に求めていた謎と推理の面白さよりも，登場人物やその場面の「エロ」「グロ」「ナンセンス」の言葉に代表される要素の方が受け入れられたのだ．これは当初，乱歩にとっては望んでいなかったことだった．しかし、『探偵小説四十年』では「こうした出かたをしたこの小説は，一般に大きな反響があった．1 作について批評を受けた分量では，私の全作品を通じて，これが最も多かったように思われる.」と書き残したり，『貼雑年譜』では「陰獣」に関する記事のスクラップが他の作品よりも多く残っていたりもする．このことから，乱歩自身は「陰獣」に対してそれまでの通俗的な作品とは違う本格探偵小説として描き，結末を曖昧にするという当時としては新しい試みを行なったため，その反応により敏感になっていたことによる反応なのではないか．また〈江戸川乱歩〉を彷彿させる「大江春泥」というキャラクターをまるで初めから存在していなかった虚像のように物語中で扱ったりするところから，「陰獣」発表前の作家像を破壊し，新たな像を生み出したかったのではないかとも考えられる．いずれにせよ，約 1 年の休筆の後に発表された「陰獣」に対する周りの反応や評価から，〈江戸川乱歩〉がどのような作家として求められているのか乱歩自身が知るきっかけにもなったのだろう．

本研究では，〈江戸川乱歩〉という作家像がどのような経緯で形成され，どのような変化を遂げたのか観測することができた．そして，〈江戸川乱歩〉は探偵小説が日本で広く周知されるのと同時期に，探偵小説作家の代名詞として使用されるようになっていた．今後は，「陰獣」以降も続く作家像の変化を追いつつ，その後登場するメディアとはどのような関係を築いていったのか．また，乱歩の評価が変化した 1930 年ごろ，作家や作品は読者にどのようなものとして受容されていたのか，乱歩以外のものについても調査が必要である．

４．この助成による発表論文等

学会発表

大学院言語文化学専攻日本文学専修大学院生発表会